

飯川雄大

DECORATOR
CRAB
イラストレーター

EXPECTING SPECTATORS
2人以上の観客にむけて

REPORT





日時 | 2024年7月27日(土)+28(日)10:00-16:00

会場 | 東京都渋谷公園通りギャラリー

主催 | (公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー



「Kids meet」は、さまざまなバックグラウンドをもつ子どもたちが、アートの体験を通じて偶然の出会いや想像もできないものごとと巡り合い、対話する機会を創出する、子どものプログラムです。

Kids meet 04では、日常のなかで見過ごされてしまうことやもの、人の記憶の不確かさなどに着目し、鑑賞者の認識を揺さぶるような作品を制作している飯川雄大さんを講師に迎えました。渋谷の街なかに自分でつくったものを自分で展示して、みんなでヒントをたどりながらそれぞれの作品を探し、鑑賞しました。感覚の変化やものの見え方など、さまざまな気づきのあるワークショップです。

講師 | 飯川雄大 (いしかわ・たけひろ)

1981年兵庫県神戸市生まれ。成安造形大学情報デザイン学科ビデオクラスを卒業。2007年から〈デコレータークラブ〉の制作をはじめ。鑑賞者が作品に能動的にかかわることで変容していく空間や物が、別の場所で同時に起きる事象とつながっているインスタレーション作品《0人もしくは1人以上の観客に向けて》、誰かの忘れ物かのような《ベリーヘビーバッグ》、全貌を捉えることのできない大きな猫の立体作品《ピンクの猫の小林さん》など、鑑賞者の行為によって起きる偶然をポジティブにとらえ、見るものに思考を誘発しながら展開していく作品を制作。主な展覧会に「感覚の領域 今、「経験する」ということ」(国立国際美術館、2022年)、「デコレータークラブ：同時に起きる、もしくは遅れて気づく」(彫刻の森美術館、2022年)、「デコレータークラブ：未来のための定規と縄」(霧島アートの森、2023年)など。

2024年は、CAPSULEでの個展「デコレータークラブ：ニューディスプレイ」、高松市美術館での常設展示、東京都渋谷公園通りギャラリー「日常アップデート」展、鳥取県立博物館「アートって、なに？ ～ミュージアムで過ごす、みる・しる・あそぶの夏やすみ」など多数参加。また、初作品集となる『デコレータークラブ』(赤々舎・せんだいメディアテーク)を刊行した。



Make Space! Use Space!
メイクスペース、ユーズスペース

サッカーがうまくなりたくて神戸のサッカー教室に通っていたとき、コーチのネルソンさんが教えてくれたのが「Make space! Use space!」という言葉。パスの出どころや 走る場所がなくて、プレーが止まってしまう前に、まず自分が動いてフリーな場所をつくる、そしてその場所を使えということだ。この言葉は作家活動にも通じると思っている。アーティストはたくさんいるし、既におもしろい作品や表現はたくさんある。だから作品を発表する機会があってもなくても、自分で場所やタイミングをつくって、いつでもどこでも観客に“仕掛ける”ことができればいい。

渋谷の街なかにも、どこかの誰かに向けて何かをする。もしかしたら見てももらえるかもしれないし、気がついてもらえないかもしれない、気がつきそうで気がつかない、けど気がついたら目が離せないような仕掛けをみんなで作ります。0人もしくは1人以上の観客に向けて!

飯川雄大

MAP

- 1 ニャッキーズ
- 2 波
- 3 捨てられた昔の電話
- 4 (渋谷の)うずまき
- 5 不動のセンター
- 6 メイクアップ
- 7 なかよし
- 8 落書きじゃないよ
- 9 傘をさしたネコ
- 10 奇妙なあなたに幸あれ
- 11 鞍馬
- 12 不法投棄の産卵
- 13 リズ
- 14 人生、北に舵をとれ
- 15 光合成
- 16 小林さんのブーケ
- 17 小林さんの吹き出し
- 18 1,2,3,4,5...,99,100,101
- 19 街をなぞる



プログラムの流れ *連続ワークショップ(全2日間)

1日目

2024年7月27日(土)

10:00-16:00

練習

10:00 集合・ワークショップの説明

～ みんなで街歩き・制作

12:00 お昼 *会場内での飲食可能です。ゆっくり休んでね。

～ 制作・展示

相談したり、つくったり中間発表もします!

16:00 解散

2日目

2024年7月28日(日)

10:00-16:00

本番!

10:00 集合

～ 制作・展示

12:00 お昼 *会場内での飲食可能です。ゆっくり休んでね。

～ 制作・展示

街に出て、みんなで作品を鑑賞!

16:00 解散







作品介绍



暑い夏の日。ワークショップには、小学生から60代まで計19名が参加しました。汗をかきながら繰り返し街を歩いたり、買ってきてほしいものリストをこそっと飯川さんに渡したり、あるいは自分で材料の買い出しに行ったり、作品設置中にほかの参加者に出くわしてそわそわすることも。中間発表を経て、2日間であなんと60作品以上が渋谷の街に設置されました。

何をつくったのか、それがどこにあるかは秘密。「作品を見つけるためのヒント」となる写真や言葉を一冊にした即席ガイドブックを手がかりに、みんなで街を歩いて作品を見つけました。その一部を紹介します。

*作品はワークショップ終了後に撤去しました。



ニャッキーズ

白澤 満 (美大受験生)

5cmほどの小さな生物を探し歩くというゲームのような企画を提案した白澤さん。「『ニャッキ!』という小さなイモ虫を11匹、渋谷の街に放ちました。ピンク色のニャッキが10匹の黄色いニャッキーズとはぐれてしまい、渋谷の街に探しに出るという冒険物語です」。



MAP 1



MAP 2



親子で参加した亜希子さん。きれいな柄の千代紙や和紙に透明感のある青や緑色のプラスチックをチェーンのようにつなげ、涼しげな造形をつくり、歩道のさりげない場所に展示しました。「“波”という言葉には、渋谷の人の波や変化の波という意味も含んでいます。そうした変化を受け容れつつ、絆を大事にしていけたらという想いを込めてつくりました」。

今回のワークショップで最年少の参加者。普段からものづくりをするのが好きなひかりさんは、創作意欲の塊！用意してあった素材を積極的に利用し、次々に作品をつくり出しました。実際には見たことのない、『クレヨンしんちゃん』の映画に出てきた古い電話の受話器から着想を得てつくったそうです。



MAP 3

(渋谷の)うずまき

富田みどり(会社員)

飯川さんの作品に魅せられ《ベリーヘビーバッグ》の運搬も経験したという富田さん。遊歩道にある2か所のベンチに水玉模様と渦巻き模様を貼り付けました。下見のために渋谷の街を巡っていた際、「暑い!」という言葉しか浮かばず、少しでも涼しくなるよう制作したそうです。「人の渦が涼し気な渦に変わっていったらいいな」とのこと。



MAP 4



不動のセンター

田村麗恵(学芸員)

1日目の終了後にそのまま100円均一の店に立ち寄り、素材を買い集めたという田村さん。渋谷の街に設置され、経年変化した公共物に手を加え蘇らせる作品をいくつも制作しました。「歩道に5本立っていたポールの1本の反射板が剥げていたので装飾しました。一人だけ衣装が違うアイドルを思いながらタイトルをつけました」。

MAP 5



メイクアップ

鈴木佳菜穂 (美大生)

代々木体育館の近くにある緑豊かな歩道沿いに作品を設置。言葉を探したところ、みんななかなか見つけれなかったのですが、作品は枯葉の色に似たファンデーションを塗った葉っぱでした。「ファンデーションを落とさないで、光合成ができなくて枯れてしまいます。“メイクは必ず落としましょう”という意味を込めてつくりました」。



MAP 6

坂の途中
岩肌にまぎれる
隠された緑

なかよし

朝倉さん

生まれも育ちも渋谷区だという朝倉さんは、パフォーマンス作品を手がけました。ワークショップの参加者たちが《なかよし》という彫刻の周囲に来ると、突然テンションの高いクラブミュージックが鳴り出し、空間が一変。「要するに、この彫刻はパリピ(パーティー好きな人々を表すパーティーピープルの略語)かなと思って」とのこと。何度も見ていたはずの彫刻のイメージが変容し、爆笑の渦に巻き込まれました。



MAP 7





親子で参加した美子さん。筒状にしたクリアファイルに、波や昆虫といった涼しげな夏のモチーフを描き、6か所のガードレールに巻きつけました。「下見をしていたときに、ガードレールにステッカーが貼られていたのを見て、ここに涼しく見えるものがあったらおもしろいかなと思って」。



地図が大好きで、何も見ないで日本地図を描くことができる元椰さん。1日目のかなり早い段階でつくるものを決めて、実制作でも早々と完成させ余裕の表情を浮かべていました。「最初は普通の猫をつくる予定だったんですが、明日の天気予報で雨が降ると言っていたのを思い出して傘のついた猫にしました」。



奇特なあなたに幸あれ

光瀬指絵（俳優／劇作家／演出家）

MAP 10



街を舞台にした演劇活動をする光瀬さんは、ワークショップのタイトルを偶然見つけ、いても立ってもいられなくなり応募。2日間で20点の作品を設置、アイデアはなんとその倍以上。「路上に置かたいくつかの石の一つだけがひっくり返せたんです。もし誰かめくる人がいて“アタリ”が出たら、その日一日うれしい気分で過ごせるかなと思って」。

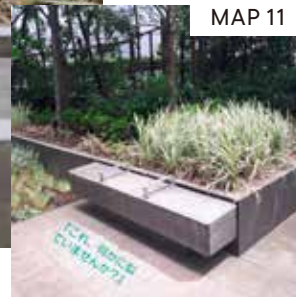
鞍馬

光 泰和（会社員）

家族で参加した泰和さんは、1日目終了後に自宅で作品を準備してきたそうです。「よくこの道を通るのですが、仕切りがついたベンチが体操競技の鞍馬に見えるとずっと思っていて、体操選手が演技している様子を、背後の草むらに紛れ込ませました」。



MAP 11



不法投棄の産卵

光 共子 (主婦)

MAP 12



「かわいく捨てられずに家に置いていた娘の工作が、ウミガメの産卵のように見えたのでスーパーボールと一緒に置いてみました」と家族で参加された共子さん。扱いに困る不用品も、置く場所や置き方、名づけ方によって見え方が変わってきます。

りす

光 萌杏 (小学5年生)

MAP 13



「渋谷にりすがいたらいいなと思って」と洞穴のように見えた道路脇のパイプを、粘土でつくったかわいらしいりすの住み処へと変貌させた萌杏さん。「かわいいとか癒やされるなど喜んでもらいたいです」とのこと。偶然気づいた観光客の方たちも「かわいい!」と絶賛していました。



MAP 14



小笠原さんは、中間発表でのほかの参加者のクオリティの高さに驚き、自宅でプランを立て直しました。「欲望に溢れた渋谷の街にも、ここみたいにエアポケットのような場所がある。人生も同じで、誰もいなくても自分の道を歩く、それがわたしの人生だと思っています」。太陽の動きに合わせて描かれた三角コーンの影は、何かを指し示しているようです。

2日間黙々と作品をつくっていた中村さん。「木のなかを流れる見えないエネルギーを、電気の光で見えるようにしたいと思って制作しました」。木の窪みに設置された電球は、太陽光で発電するものを使用しているので、十分に充電されれば光を見ることができるでしょう。



MAP 15



小林さんのブーケ

K2 (会社員)

MAP 16



飯川さんの作品の大ファンで、地方の展示なども観に行くというK2&T2夫妻。K2さんは生け垣の少し植物が少なくなっている場所に目を付け、毛糸でつくったかわいい花束に飯川さんの作品に登場する《ピンクの猫の小林さん》を潜ませました。



小林さんの吹き出し

T2 (会社員)

MAP 17



建物の壁に貼り出された注意書きに目をつけたT2さん。「水滴が落ちると注意書きがしてありましたが、夏だったら涼しいのではないか」と思い、それに応答するかたちで《ピンクの猫の小林さん》型のコメントをプラスしました。



1,2,3,4,5...,99,100,101

小谷 由 (美大受験生)

MAP 18



「渋谷の街を歩いてみると地面が継ぎ剥ぎだらけだったので、ギャラリーを出たところから素材が変わるたびにテープを貼り続け、番号をつけていきました。100で力尽きてしまった様子も見られます」。建築学科を目指す小谷さんの目のつけどころに、参加者一同感心していました。



街をなぞる

衣笠孝太郎 (アーティスト)

MAP 19



「現実にあるものには輪郭線がありませんが、輪郭線を描くことによって平面的な絵のように見える。実在の建物が塗り絵のように見える」という衣笠さん。1日目から同じコンセプトで制作を続けて、2日間でだいぶ広範囲にわたり縁取りされた空間をつくり出しました。



視点を変えれば、スペースは生まれる

2日連続ワークショップ「デコレータークラブ——0人もしくは1人以上の観客にむけて」を終えて、講師の飯川雄大さんにインタビューを行いました。なぜこのような場をひらき、どのようなことが起きて、何を考えたのか。渋谷の街に小さな芸術祭が生まれたプロセスを振り返ります。

聞き手・構成 | 上條桂子



写真 | 飯川雄大

「作品制作の過程」を共有する

——今回のワークショップは、作家の作品解説トークや、作家の作品に似たものをつくるワークショップとは違って、2日間かけて渋谷の街を歩き、自ら作品を設置する場所を選び、作品を制作し、発表するというものでした。

「みんなで一緒に〇〇をつくりましょう！」という何をつくるかが決まっているワークショップはよくあるし、それはそれでおもしろい。でも、〈デコレータークラブ〉という、制作と展示と発表を頼まれなくても行うシリーズをはじめから、作品そのものというよりも作品を発表するまでの過程——作品を準備したり、展示場所を考えたりすることを共有するのがおもしろいと感じていて、どうせ体験をする時間をつくるのであれば、「作品制作の過程」を共有したい、という想いがありました。

でも、いわゆる通常のワークショップのように、1~2時間で作品を完成させるようなタイムテーブルでは絶対に時間が足りない。作品制作ってすごく時間がかかるものですし、アイデアを考えるのはもちろん、制作すると

きに試行錯誤したり、展示場所を悩んだりしますよね。参加者にとってはすごく大変だとは思いますが、そうした大変さを一部でも感じてもらえたらと思いました。

2日間という時間をかけるのは、参加者にこのワークショップの特性を体で理解してもらうための時間というか。受け身で来る人が多いと思いますが、僕らはあえて何もアドバイスはしません。何をつくるのかも決まっていなしい、何かをつくるための道順も決まっていない、何をしたらいいのかわからないという状況は、参加者にとってもしんどいことだと思います。自分で動くしかありません。その状況に慣れるのに1日はかかる。1日目が終了して見て、ちょっと落ち着くと「もっとできたかもしれない」「ああすればよかった」と後悔する。そして、2日目に挑むと体が動き出して、チャレンジできる。なので、ワークショップにはできるだけ長い時間が必要でした。

街が展示会場に切り替わる瞬間

——「0人もしくは1人以上の観客にむけて」というタイトルに惹かれて応募した参加者もいました。この言葉を

使いはじめたのはいつ頃からなのでしょう？

2007年くらいからはじめた作品シリーズに〈デコレータークラブ〉というものがあります。作家は美術館やギャラリーで作品を発表するのが仕事だと思っていたのですが、展示機会がないときは何をしたらいいのだろう、と考えていました。展示機会がないと仕事をしないのでは、頭も体もなまってしまいます。そこで、ライフワークとして制作と発表が続けられるサイクルをつくりたいと思ってやりはじめたのがこのシリーズです。

街に作品を潜ませて、そのヒントとなるような写真を撮影してガイドブックとして見せる。誰も見てくれないかもしれないけど、制作と発表とアーカイブをするという。そのシリーズを制作する際にいくつかのルールを設けたんですが、その一つが「0人もしくは1人以上の観客にむけて」というものでした。もちろんたくさんの人に見てはもらいたいのですが、何万人もを狙うのではなく、1人以上を狙うという。

そして、自分のアイデアをかたちにして、人に見せようとするときに、うまく伝わらないっていうもどかしさを

抱えながら、どういう1人以上にどういうふうに見つけて欲しいかを試行錯誤するところまでが、〈デコレータークラブ〉でやろうとしていることです。

——参加者募集のチラシに「Make Space! Use Space! /メイクスペース、ユーズスペース）」という言葉とメッセージが書かれていましたが、ワークショップが進むにつれて、飯川さんがこの言葉を伝えた意味がわかってきたような気がしました。

この言葉は、自分に向けたスローガンみたいなもので、作品を発表する場がなくても作品をつくり続ける、見せ続けるということをしなくてはならないという。渋谷の街って、ぱっと見ても自分の隙間ってなさそうじゃないですか。でも、視点を変えれば、スペースは生まれる。ワークショップの時間は、参加者が自主的に何度も街を下見に行っていましたが、2回、3回と回数を追うごとに街が展示会場に切り替わる瞬間というのがきっとあったと思います。





この場、このメンバーならではの作品

—1日目の中間発表はいかがでしたか？その時点で軌道修正を加えるというか、参加者自身に考えてもらうような声かけをしましたか？

発表する作品を見ていて、人の視線くらいの高さの街の隙間にささやかな作品を設置するものが多かったのもう少しバリエーションがほしいなと思いました。なので「自分の体を使うのもありますよ」とか「いろんな高さのものを」ということを伝えましたね。あと、写真や映像など記録担当のメンバーたちにも作品をつくって設置するよう促しました。その意図としては、発想の部分で少し違う人がいたらみんなの刺激になるだろうと思ったから。また、かれらも作家として10数年活動してきた人たちばかりなのですが、最近は短い時間で思いついたアイデアで、瞬発的に作品をつくることをしていなさそうだなと思ったのがあります。作家になってしまうと、誰にどう見せるとか、自分の今後にどうつなげていくとか、いろんなことを考えてしまっただけなくなる部分がある

んですよ。そんななかで、次々と作品アイデアをかたちにする参加者たちを側で見ていると、きっと奮い立たせられたと思ったので、ぜひ参加してもらいたかった。

—記録担当のメンバーもそれぞれおもしろい作品をつくっていて、2日目の発表も盛り上がりましたよね。では、みなさんの作品で印象的だったものを教えてください。

まずは、光萌杏さんの《りす》。造形もかわいいし、質感やサイズ感も絶妙。《捨てられた昔の電話》をつくった橋本ひかりさんも発表のときにきちんとつくった理由を話せていてよかった。子どもたちは、純粋に何かをつくって置いて見てもらう、その気持ちよさ、楽しさを体験できていたらいいなと思いました。

大人の参加者は、視覚的なアイデアを視覚的な表現に落とし込んでいた人たちが多なかで、仕組みを作品化した中村悠太さんの《光合成》や、自らの体を使ってパフォーマンスを展開した朝倉さんと光瀬指絵さんは表現力が突出していましたね。また、土地の境界標など街にある規定のデザインをいかして、それをさらに拡張させ

るようなものをいくつもつくった田村麗恵さんの作品もきちんと設計されていた。一方で、僕のファンと公言されていたT2 & K2さんの夫婦は、僕の作品に引っ張られていたので、猫を禁止にしてもよかったかとも思いました（笑）。それから、フォトグラファーの前谷開さんの作品がウケてましたね。

——落とし物のポロシャツとズボン自分を着ていたTシャツとズボンと入れ替えて、2日目のワークショップ中ずーっと着ていたパフォーマンスですね。みんな1日目に道端にかけてあったポロシャツと生垣に落ちていたズボンを見ていたはずなのに、それを着ていた前谷さんには誰も気づいていなかったのが発表の際は大盛り上がりでした。

僕も、前谷さんってポロシャツを着たりする人だったっけなくて、何度か思っていたんですが特に指摘してはなくて。発表で腑に落ちました（笑）。よく見たらズボンはぶかぶかでベルトが余っていたし、裾も大きく折り返していましたよね。前日にみんなで体験した記憶を作品にいかす、知っているエピソードを使うというのが、す

ごくおもしろかった。別の人の子の作品の意味を汲み入れた作品が生まれたり、1日目にほかの人の発表を見て悔しい思いをして次の日の作品にいかしたり。美術作品って、系譜があったり、社会の変化を踏まえていたり、歴史がありますよね。たった2日間ですが、その2日間の歴史というか時間を取り込んだアプローチがありました。この場、このメンバーならではの作品が生まれていたのがよかったです。

今回のワークショップにいかしたいなと思ったことは、アーカイブの手法でしょうか。作品を見つけるヒントとして、作品そのものを写さずにそれを匂わせる風景を撮るというのは僕がやっていたことで、みなさんわりとその手法を使っていた。今回のような作品の場合は、作品との出会いがとても重要になります。たくさんの人に作品を見てほしいけども、本来であれば全員に自分のタイミングで「見つけて」ほしい。どう見つけてほしいのかも含めて作品を考えて、情報を見せる順番や、どれくらい事前に見せるかというコントロールをするのはとても重要。またどこかでやりたいですね。



前谷開さんの作品のヒント





あとかき

Kids meet 04では、自ら考えること、想像することを促す作品を制作し続けている飯川雄大さんを講師に迎え、7月、猛暑の2日間に渡り、渋谷の街なかに自分でつくった作品を密かに展示し、みんなで鑑賞してまわるワークショップを実施しました。Kids meet は子どものプログラムですが、夏休み期間に開催することとワークショップの内容を鑑みて「昔子どもだった人たち」にも門戸を広げ、その結果、小学校1年生から60代まで計19名の参加があり、異世代交流の場にもなりました。

ものをつくって決まった場所に展示するのではなく、「何をつくるのか」「材料は何を使うのか」「どこに展示をするのか」をすべて自分で考え、フィールドワークを行い、材料を手配するなど、作家が作品をつくる過程を体験することで、「もしかしたら見てもらえるかもしれないし、気がついてもらえないかもしれない、気がつきそうで気がつかない、けど気がついたら目が離せない」という〈デコレータークラブ〉のコンセプトをも体感する機会となりました。

この体験は、子どもや大人に関係なく、新たなものの見方や想像力を掻き立て、視野を広げる経験になったのではないのでしょうか。ワークショップの帰り道の渋谷の風景、さらにはそれぞれの日常において、小さな変化への気づきにつながると嬉しいです。

竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

Kids meet 04

飯川雄大「デコレータークラブ——0人もしくは1人以上の観客にむけて」

[ワークショップ]

企画 | 飯川雄大、竹野如花（東京都渋谷公園通りギャラリー）

運営 | 竹野如花・小野佳奈（東京都渋谷公園通りギャラリー）

手話通訳 | 橋本一郎、保科隼希

手話サポート | 岡島珠実、村上 諒

写真 | 前谷 開

映像記録 | 西松秀祐、石黒健一、橋爪亜衣子

記録 | 川村庸子、上條桂子

主催 | (公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

[レポート]

編集 | 川村庸子

執筆 | 上條桂子

写真 | 前谷 開

アートディレクション&デザイン | 高見清史

印刷 | 株式会社サンエムカラー

企画・発行 | (公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行 | 2024年12月

ウェブサイト | <https://inclusion-art.jp>

Instagram @skdgallery_tokyo

X @skdgallery

※営利・非営利問わず、本誌のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。



Kids meet 04 記録映像

<https://www.youtube.com/watch?v=grmCeQrxmX8>



